

# メタ言語宣言表現の 「文脈化」

—表現教育の視点から

李 婷

## ◆要旨

**本**稿は「これから行う言語行動を予告する表現」をメタ言語宣言表現と規定し、テレビドラマのシナリオより多様性のある用例を収集して分析したものである。まず、杉戸（1983）の「言語行動のどの成立要素に言及しているのか」によって、メタ言語宣言表現の用例を類型化した。それから、「言及される要素に対する主体の認識」と「言語行動の性質」の視点を取り入れ、類型ごとの「文脈化」のあり方を考察した。結果として、メタ言語宣言表現の実際に使われている文脈を特定でき、それぞれ「何のために」使われ、何が表現できるのかについての究明を可能にした。日本語教育の現場では、具体的な文脈におけるメタ言語宣言表現を学習者に提示し、理解と生成の両面で指導する必要があるだろう。

## ◆キーワード

メタ言語宣言表現、表現教育、「文脈化」、言語行動、言語行動の成立要素

## ◆ABSTRACT

In this thesis, I have defined 'advanced indication of the form of speech act to be started shortly' as the meta-discourse-announcing expression, and have collected and analyzed various examples of the scenarios of TV dramas.

- First, I performed a preliminary classification according to Sugito (1983), 'To which inscape of speech act is referred?'
- Second, I adopted two notions of 'the speaker's cognition in the referred inscape' and 'the nature of speech act' to review the whole concept of 'contextualization'.

Consequently, I have identified the contexts used in the practical applications of such expressions. It is essential to present how to practically apply the meta-discourse-announcing expression in the specific contexts to the learners, and to implement the guidance in comprehension and generation of speech.

## ◆KEY WORDS

Meta-discourse-announcing expression, Education of expression, Contextualization, Speech act, Inscape of speech act

The Contextualization of  
Meta-Discourse-Announcing Expression  
From the viewpoint of education  
for expression and communication

LI TING

## 1 はじめに

普段の言語生活を観察していると、「説明しておくね」「謝ります」「正直に言いますと」のような、これから行う言語行動<sup>[註1]</sup>を宣言する表現が多いことに気づく。こうした表現は、メタ言語表現の一種である「宣言」(西條1999)であるが、本稿ではこれらをメタ言語宣言表現と名付けて分析する。

日本語学習者にとっては、このような表現を使いこなすのは簡単ではないが、きちんと使えないと、話題や表現意図などが予告されずに聞き手に理解の負担をかけたり、相手との関係を思う通りに調節できずに人間関係がぎくしゃくしたりする事態さえ生じてしまう。そもそも、なぜ話を始める前に「宣言」するのか。メタ言語宣言表現はどのような人間関係や文脈の中で、「何のために」使われ、何が表現できるのか。以上の問題を究明することは、学習者の理解とその自発的運用を支援する表現教育に繋がるのではないかと考える。

## 2 先行研究と本稿の位置づけ

### 2.1 メタ言語表現について

メタ言語表現とは「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」(西條1999:14)である。日本語におけるメタ言語表現についての研究は、杉戸(1983,1989,2005)、古別府(1993)、西條(1999)などが、主要なものとして挙げられる。

杉戸(1983,1989,2005)は、「注釈」「きまりことば」「気配りの構造」の視点から、メタ言語表現を考察した。メタ言語表現に言及される言語行動の成立要素として、「言語行動の主体」「言語行動の相手」「言語行動の機能上の種類」「言語行動のジャンル」「言語形式・言語表現」「言語行動の素材・話題」「言語表現の調子」「物理的場面」「心理的場面」「接触状況・媒体」「言語行動の目的・動機」「言語行動の結果・効果」の12項目を立て、言語行動の研究に重要な枠組みを提供している。ただ、メタ言語表現は言語行動のどの要素に言及してい

るのかは究明されているが、なぜそれらの要素に言及するのかは分析されていない。また、例として挙げられたメタ言語表現が文脈から切り離して分析されているので、どのような人間関係と文脈で使われているのかが解明されていない。日本語母語話者にとっては、メタ言語表現の使用される文脈は大体想像できるかもしれないが、日本語学習者にとっては、母語話者と同じように想像できるとは限らず、その使い方はそう簡単に理解できるものではないだろう。

古別府(1993)は、研究報告場面を分析し、そこでのメタ言語表現を「主題化」「論点化」「行動表示」「注釈」「ことわり」「接触」「儀礼」と分類している。その中で、「行動表示」を「専門的内容に関する発表を成立させる言語行動の種類を積極的に明示するメタ言語表現」と定義し、「ちょっと付け加えておきますと」「これは詳しく分析いたしますと」の用例を挙げている。また、「行動表示」の特徴的要素として、「簡単に」「正確に」「一般的に」などの副詞を抽出し、「いかに説明するかを具体的に示している」と論じている。しかし、動詞とその前に位置する副詞だけに注目しているため、メタ言語表現を構成する他の部分が見落とされる可能性があり、表現成立の解明には不十分と言える。

西條(1999)はディベート・シンポジウム・テレビ討論場面を取り上げ、メタ言語表現を「話題の提示」「焦点化」「総括」「サブポイント提示」「補正」「表現の検索」「宣言」と分類している。そのうち、古別府(1993)の「行動表示」と共通しているのは「宣言」であり、「これからすることを宣言する表現」と定義され、「いくつか質問いたします」「では反駁いたします」の用例が挙げられている。しかし、人間関係や話題が固定され、発話の順序も一定のルールに従う討論場面においては、「宣言」の使用<sup>[註2]</sup>は少なく、しかも、その用例の大半が討論場面でしか使われていない表現である。従って、種類ごとに、とりわけ「宣言」に焦点を当てた更なる研究へ展開しようとする筆者にとっては、量的にも限界があり、場面的にも適切ではない。

従来の研究を概観する限り、「メタ言語表現」の分類は行われているものの、その結果貼られたラベルだけでは、どのような文脈で、「何のために」使われ、何が表現できるのかについての究明ができず、学習者の理解を助けられない。

## 2.2 「文脈化」について

学習者の理解支援のために、メタ言語表現は、そのものだけでなく、その前後を含めた全体的な文脈において考察する必要がある。そのために、「文脈化」の観点が必要となってくる。「文脈化」とは、ある表現が「誰が・誰に向かって・何のために」使われているのかを記述することであるが、これは川口(1996)によって提唱された「文脈重視」の外国語教授理念・指導方法である。学習項目について、「何の表現に必要なのか」を明らかにした上で、指導を行った方が学習者のための表現教育に繋がれるとの考えである。しかし、これまでの日本語教育研究において、「文脈化」の観点を取り入れた研究は数多く行われてきたが、メタ言語表現の研究にはまだ取り入れられていない。

## 2.3 本稿の位置づけ

筆者は、表現教育の視点から以下の2点を主張する。1点目に、メタ言語表現は「言ったこと、これから言うことに言及する表現」(2.1参照)である以上、前後の文脈、とりわけ、それによって言及される部分の提示が必要不可欠である。2点目に、メタ言語表現そのものに抽象度の高いラベルを貼るより、具現化、可視化できる記述の方が学習者の理解を助け、自らの使用に繋がれる。

以上のことから、本稿はまず初めにメタ言語表現の一種類である「宣言」、すなわち、メタ言語宣言表現に焦点を当て、表現教育の視点から、「文脈化」の記述を試みる。(1)メタ言語宣言表現はこれから行われる言語行動のどの要素に言及しているのか、(2)主体がその要素をどのように捉えているのか、(3)言及される言語行動はどのようなものなのか、以上の3点はメタ言語宣言表現の使われる文脈である。こうした3点の相互作用でできあがった具体的な文脈を特定した上で、「何のために」使われ、何が表現できるのかを記述することを、本稿におけるメタ言語宣言表現の「文脈化」と規定する。

## 3 メタ言語宣言表現の用例収集と認定基準

メタ言語宣言表現の全体像を捉えようとするのは困難な作業であるが、でき

る限りその種類を網羅するために、場面を限定せずに多様性のある用例を収集する必要がある。そして、「文脈化」の記述を行うためには、多様な文脈と人間関係が展開され、しかもそれらが分かりやすい資料が必要である。従って、用例収集の資料として、テレビドラマのシナリオがふさわしいと考える。また、テレビドラマは学習者にとってもアクセスしやすく、とりわけ、日本語使用環境に恵まれていない海外の学習者に分かりやすい文脈が提供できる教材としても利用できる利点がある。

本稿では、近年放送されたテレビドラマの中から、登場場面や人間関係のバランス、会話の自然さなどを考え、『アネゴ』(2005)・『ドラゴン桜』(2005)・『たった一つの恋』(2006)・『医龍』(2006)・『14歳の母』(2006)・『ハケンの品格』(2007)・『1ポンドの福音』(2008)・『BOSS』(2009)の8部を選定し、それぞれ(ア)・(桜)・(恋)・(医)・(母)・(ハ)・(福)・(B)と略称し、資料として扱う。

メタ言語宣言表現の定義を、「これから行う言語行動を予告する表現」と規定し、認定する際には、「言う」や「説明する」のような言語行動を明示する動詞の有無を手がかりとする。こうした定義と認定基準に基づき、上述の資料からメタ言語宣言表現が136例収集できた。これは採取したメタ言語表現全体(396例)の34%を占め、最も多用される種類であった。

## 4 メタ言語宣言表現の「文脈化」

メタ言語宣言表現の定義と認定基準を満たす最も基本的な構造は、「まあ、言っときますけど、」(ア)、「ご報告します。」(ア)、「説明しましょう。」(母)のような動詞「言う」、または、「言語行動の機能上の種類」を明示する動詞のみから成り立つものである。収集した用例から見ると、こうした基本的な構造より、より膨らみのある表現が多く、複雑な様相を呈している。具体的な文脈を特定し、「文脈化」の記述をするためには、以下の手順に従う。

まず、2.3で規定した(1)の「これから行われる言語行動のどの要素に言及しているのか」については、2.1で言及しように杉戸(1983)で答えられるため、そのまま援用する。それから、(2)の「主体がその要素をどのように捉えているのか」については、メタ言語宣言表現に反映されている。例えば、これから

の言語行動を行う際に、この要素が相手にとって望ましいかどうか、適格かどうかという判断や認識である。従って、メタ言語宣言表現から読み取れた要素に対する主体の認識によって、(1)の類型をさらにそれぞれ2種類に細分化できる。さらに、(3)の「言及される言語行動はどのようなものなのか」、要するに、行われる言語行動が相手にとってポジティブなのか、ネガティブなのかについては、文脈から判断する。

杉戸(1983)によって提供された12項目(2.1を参照)のうち、「言語行動の機能上の種類」のほかにも、「言語行動の主体」「言語行動の相手」「言語行動の素材・話題」「言語表現の調子」「物理的場面」「言語行動の目的・動機」の6項目が収集できたので、それぞれ4.1から4.6で考察する。また、杉戸(1983)になかった「言語行動の量的要素」に言及する用例も収集でき、これを新しい項目として4.7で述べる。さらに、杉戸(1983)における用例はほとんど1つの要素に言及しているが、本稿においては、2つ以上の要素の組み合わせに言及する用例も数多く収集したため、4.8で考察する。

上述した手順で「文脈化」していけば、4.1から4.7の類型ごとに、それぞれ4つのパターンに分けられる。「言語行動の主体」を例にして説明すると、【適格な主体】+【ポジティブな言語行動】、【適格な主体】+【ネガティブな言語行動】、【不適格な主体】+【ポジティブな言語行動】、【不適格な主体】+【ネガティブな言語行動】という4つの文脈が考えられる。本稿は、具体的な文脈を見やすくするために特定し、記述する作業であり、決してメタ言語宣言表現の体系的・徹底的な分類を目指しているものではなく、また、紙幅の関係においても、すべての文脈を提示して、分析することができない。従って、4.1から4.8では、それぞれ文脈のパターンが異なる用例を2つ挙げ、「文脈化」記述のありかたを提示する。文脈は【 】で、メタ言語宣言表現は下線で示す。

#### 4.1 「言語行動の主体」への言及

これから「誰が」言語行動を行うのか、またどのような立場に立って、どのような身分や資格を持ってその言語行動を行うのかに言及する類型である。「妻の立場から言わせてもらおうと、」(ア)、「僕は君にこんなことを言えた立場じゃないけど、」(ア)、「先輩として助言してやる。」(医)などがその例である。

主体への言及には、当該言語行動を行う主体として適格かどうか、資格があるかどうかに対する主体自身の判断や認識が反映される。

#### 例(1)【適格な主体】+【ネガティブな言語行動】

〈未希は妊娠の秘密と生みたい気持ちを親友の恵に打ち明けている。(母)〉

[1] 未希：まさか、こんなことになるなんて思ってなかったけど、そんな言い訳は、通用しないことなんだ。

[2] 恵：未希、本当に生みたいと思ってんの？ 私、友達として言う。止めたほうがいいよ。親の言うことって大体間違ってるけど、今回だけは正しいよ。早くおろして無しにした方がいい。

#### 例(2)【不適格な主体】+【ネガティブな言語行動】

〈菜緒は社会的地位的格差の激しい男性と恋に落ち、家族に反対される中、似た恋をしている親友の裕子に相談している。〉

[1] 菜緒：じゃあ、どうすればいいの？ 教えてよ。(ため息)ごめん。

[2] 裕子：こんなこと、私が言うのもなんだけど、やっぱり無理なんじゃないのかなあ。もう諦めた方がいいんじゃないのかなあ。

例(1)において、恵は下線部分で、自分が親や先生より未希に近い立場に立っていること、そして、親密な友達であることを強調した上で、未希の意に反するネガティブな助言をしている。一般的に、ネガティブな言語行動は受け入れられにくいものであり、下手すると相手との関係を壊してしまう恐れもある。しかし、資格のある適格な主体であれば正当性があり、受け入れられる可能性が高くなる。従って、こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、適格な主体を明示することで、これから行うネガティブな言語行動を正当化させ、当然性や信憑性の高いものとし、相手との関係性を保ちながら、当該言語行動を受け入れられやすいものにすることができる。

例(2)において、例(1)と同じくネガティブな言語行動で、しかも、同じく親友関係である。しかし、裕子は菜緒と似たような恋をしているため、菜緒に反対する資格がない。ネガティブな言語行動は不適格な主体によって行われる場合、正当性が極めて低く、相手に反発される可能性が高い。それでも、裕

子は冷静且つ現実的に考え、菜緒のための助言をしたのである。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、資格がないことを自ら認め、その資格を超えた何らかの理由で、あえて行う言語行動の必要性を暗示し、ネガティブな言語行動を相手に受け入れられやすいものにすることができる。

## 4.2 「言語行動の相手」への言及

これからの言語行動が「誰に」向かって行われるのか、その相手を特化したり、相手の立場や身分、主体との人間関係に言及したりする類型である。「あなたにだけは言うけど、」(ハ)、「あなたに一番最初に伝えようと思って、」(B)などがその用例である。相手への言及には、当該言語行動の相手として選ばれた人が適格かどうか、当該相手とどのような人間関係を構築したいのかという主体の判断や認識が反映される。

### 例 (3) 【適格な相手】 + 【ポジティブな言語行動】

〈朝の通勤時間、先輩の春子に駆け寄る美雪が話しかけている。(ハ)〉

[1] 美雪：先輩！ 春子先輩！ おはようございます。

[2] 春子：おはよう。

[3] 美雪：寒い。春はまだまだ遠いですね。先輩だけに言っちゃいますけどね、私冷え性なもので、スカートの日は毛糸のパンツ履いてるんです。

### 例 (4) 【不適格な相手】 + 【ネガティブな言語行動】

〈水野は良乃に自分の彼氏に近づかないようにと警告され、反発している。(桜)〉

[1] 良乃：とにかく、勇介には私という彼女がいる。幼馴染だからって変なちょっかい出すのをやめてね。

[2] 水野：そんな彼女さんにお聞きしますけど、あなたの彼氏、今日は何で来てないのかなあ。

[3] 良乃：(下を向いて、小声で) 知らない。

例 (3) において、美雪は誰にも知られたくない秘密を積極的に先輩に話すというフレンドリーでポジティブな言語行動を行い、下線部分で適格な相手を

先輩だけに特化している。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、親近感や信頼感を表し、相手との距離を縮めることができる。

例 (4) において、良乃は勇介の彼女でありながらも、勇介が学校に来ない理由を知らず、[2] で行われる言語行動の相手として不適格である。水野は良乃の話で不快を感じ、ネガティブな言語行動の矛先を、わざと相手として不適格な良乃に向けた。しかも、相手の身分、すなわち、勇介の彼女であることを皮肉して特化し、そのメンツを潰そうとしている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、ネガティブな言語行動をわざと不適格な相手に向けることで、相手への攻撃や脅かしを示すことができる。

## 4.3 「言語行動の素材・話題」への言及

これからの言語行動は「なに」「どのようなこと」についてなのか、その素材・話題の内容や性質に言及する類型である。「ねえ、変なことを聞くけど、」(ア)、「手っ取り早い方法を教えてあげる。」(桜)、「では、今後の授業の進め方について説明する。」(桜)などがその例である。この種類は、相手の注意を喚起し、情報面や情意面での準備を整えさせ、談話理解を導き、助けることでほぼ共通している。素材・話題への言及には、当該素材・話題が相手にとって望ましいかどうかという主体の判断や認識が反映される。

### 例 (5) 【望ましい素材・話題】 + 【ポジティブな言語行動】

〈社長は記事の差し止めで編集長に交渉し、うそを見透かされている。(母)〉

[1] 編集長：それはおかしいですよ。だって、あなたは会社の宣伝になるからって、このインタビューを引き受けたんでしょ。

[2] 社長：じゃあ、本当のことを申しあげますね。実は息子から泣きつかれたんです。私、あまり家のことを喋ると、学校で冷やかされてしまうって。

### 例 (6) 【望ましくない素材・話題】 + 【ネガティブな言語行動】

〈斉藤はフィアンセに別れを告げようと、本音を話し出している。(恋)〉

[1] 斉藤：じゃあ、僕も本当のことを言います。菜緒さんはめちゃめちゃかわいい。常識もあるし、どこに出しても恥づかしくない。そ

れに、社長の娘さんです。将来おいは会社の中でよいポストも  
らえるかもしれない。いや、継げるかもしれない。……

例 (5) のように、相手にとって望ましい素材・話題は、ほとんどポジティブな言語行動に展開される。社長は相手が「本当のこと」を知りたがっているのを判断し、下線部分で相手の望んでいる素材・話題に言及することで、期待や関心を持たせ、自分を信じてほしいという表現効果を狙っている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、相手に期待や関心を持たせることができる。

例 (6) における「本当のこと」は、字面において例 (5) と同じである。しかし、例 (5) は相手が知りたがっている素材・話題を話すポジティブな文脈であるのに対して、例 (6) は相手を傷つけるかもしれない素材・話題をやむを得ず話すネガティブな文脈である。従って、文脈から切り離された表現形式のみを分析する場合、同じ種類に片付けられてしまう恐れがある。文脈に基づいた判断を重んじる「文脈化」記述の重要性も浮上してくる。例 (6) の下線部は、これから相手にとって望ましくないと判断した素材・話題を明示することで、本当は話したくないが、「本当のこと」だから許してくださいという表現効果を狙っている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、相手に情意面での準備・覚悟をさせると同時に、配慮や許しを求めることもできる。

#### 4.4 「言語行動の調子」への言及

これからの言語行動がどのような調子で、「どのように」行われるのかに言及する類型である。「はっきり言うけど、」(ア)、「分かりやすく言えば、」(母)、「じゃあ、単刀直入に聞こうかなあ。」(母)などがその例である。調子への言及には、主体が言語行動を行う際の態度や姿勢が含まれ、当該調子が相手にとって望ましいかどうかという主体の判断や認識が反映される。

#### 例 (7) 【望ましい調子】 + 【ポジティブな言語行動】

〈実習医は看護婦の里原に悩み事を話し、からかわれている。(医)〉

[1] 実習医：僕は真剣に悩んでるんです。

[2] 看護婦：あ、そう。じゃあ、真剣に答える。心臓外科医にとって、一

番必要なものは何だ？

#### 例 (8) 【望ましくない調子】 + 【ネガティブな言語行動】

〈賢介は東海林のために助け舟を出したが、春子に無視されている。(ハ)〉

[1] 賢介：東海林さんは、個人的にお礼が言いたくて来たんですよ。会社を一步出たら、人間同士の付き合いがあってもいいんじゃないんですか。

[2] 春子：はっきり言って、時間の無駄です。

例 (7) において、里原は最初はからかうというネガティブな言語行動を行っていたが、[1] の反応から、相手が「真剣」な調子を望んでいると判断し、[2] の下線部分で望ましい調子と悩みの相談に乗るというポジティブな言語行動へと調整している。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、相手の望んでいる調子で、協力的・積極的な態度を示し、相手の心情に寄り添うことができる。

例 (8) において、春子は賢介に出された助け舟を無視してまで、望ましくない調子で、相手と異なる考えを通すという相手にとってネガティブな言語行動をわざと行っている。下線部はこれからの言語行動が「はっきり」という調子で行われることを顕在化し、相手に覚悟をさせている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、相手の感情を無視した非協力的・消極的な態度を示し、これから行われる言語行動を予測させ、相手との距離を置くことができる。

#### 4.5 「物理的場面」への言及

これからの言語行動が「いつ」「どこで」「どういう状況で」行われるのか、その時間や空間、状況などの物理的場面に言及する類型である。「どうしても今、言っておきたいんだ。」(ア)、「こんなことになったから言うんじゃないんだけど、」(ア)、「こんなことを告白するのは今日だけだけど、」(医)などがその例である。物理的場面への言及には、当該言語行動が行われる際の物理的場面が適格かどうかという主体の判断や認識が反映される。

#### 例 (9) 【適格な物理的場面】 + 【ポジティブな言語行動】

〈黒沢が奈央子の後にエレベーターに乗り、2人っきりの機会を作った。(ア)〉

[1] 黒沢 : あのと、やっぱ、こういう機会だから、謝っておきます。誕生日の夜はすみませんでした。あの、結婚とか、そういう言葉に動転しちゃって。

[2] 奈央子 : もうそういう話はやめてよ。ね、もうね、思い出したくもない。

例(10)【不適格な物理的場面】+【ポジティブな言語行動】

〈未希と赤ちゃんは退院して、母親の車で家に向かっている。(母)〉

[1] 母親 : 明日からは戦争だから、一日早いけど、今言っておくわ。15歳の誕生日、おめでとう。

[2] 未希 : ありがとう。ありがとうね、お母さん。

例(9)において、謝るといのは相手にとってポジティブな言語行動であるが、奈央子のプロポーズを断ったことに対する謝りであるため、人前でなく、2人っきりの物理的場面が適格である。黒沢はわざと2人っきりの機会を作っておき、下線部分で今がチャンスということを強調した上で謝っている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、「いま」「ここで」「こんな状況で」行われる言語行動の緊急性、当然性を強調することができる。

例(10)において、誕生日のお祝いを言うのがポジティブな言語行動である。しかし、それは当日言うのが一般的であるため、1日早く言うことがタイミング的に適格ではない。母親はそれを知った上で、下線部分でなぜ不適格なタイミングで言うのかの事情を説明し、娘の理解を得ようとしている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、不適格な物理的場面で言語行動を行おうとすることの不適格さを認め、相手の配慮や許しを求めることができる。

#### 4.6 「言語行動の目的・動機」への言及

「なぜ」「何のために」これからの言語行動を行うのか、その目的や動機に言及する類型である。「勘違いしてるようで言っとくけど、」(桜)、「自分の実力に気づいていないみたいだから教えといてあげる。」(恋)、「念のため言っとくわ。」(ハ)などがその例である。目的・動機への言及には、当該目的・動機を強く主張すべきか、控えめに主張すべきかという主体の判断や認識が反映される。

例(11)【強めの目的・動機】+【ネガティブな言語行動】

〈一之瀬は娘を妊娠させた智志の母親にそのことを知らせている。(母)〉

[1] 桐野 : 14才で妊娠? 自由に育ててらっしゃるんですね。

[2] 一之瀬 : 誤解のないように、先に申し上げておきますけども、未希はいわゆるぐれた子ではございません。人並みにしつけもしてきました。

例(12)【控えめの目的・動機】+【ネガティブな言語行動】

〈博子は将来を心配し、不倫相手の部長にその考えを確かめようとしている。(ア)〉

[1] 博子 : 参考までに聞きたいんですけど、やっぱり、愛人が結婚するって言い出したら、男は悪あがきするもんなんですか?

[2] 部長 : まあ、おれなら……

例(11)において、一之瀬が娘のことを弁明しようとするのは、相手に反駁するためのネガティブな言語行動である。下線部分は「誤解のないように」という目的・動機を強く主張することで、自分の弁解に妥当性を持たせている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、ネガティブな言語行動に妥当性を持たせ、より一層重みのあるものとして、相手に受け取らせることができる。

例(12)において、博子の重たい質問は、相手にきつく受け止められるかもしれないネガティブな言語行動である。気軽に答えてもらうために、下線部分は、言語行動の目的・動機について、あくまでも「参考までに」と明示することで、表現効果の重みを落とし、相手にかかる心的負担を減らしている。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、ネガティブな言語行動を相手に軽く受け取らせることができる。

#### 4.7 「言語行動の量的要素」への言及

これから「どれだけ」話すのか、当該の言語行動が何度行われるのか、発話量や回数などの量的な要素に言及する類型である。「これだけは言っとくわ。」(ア)、「最後にもう一度聞く。」(医)、「何でも言うけど、」(福)などがその例である。量的要素への言及には、当該言語行動が多くの発話量や回数で行われるべきか、それとも少ない発話量や回数で行われるべきかという主体の判断や認

識が反映される。

#### 例 (13) 【多めの量的要素】 + 【ネガティブな言語行動】

〈桜木は勉強嫌いな高校生たちに東大に進学するようにと勧めている。(桜)〉

[1] 桜木：そういう世の中が気に入らねえんだったら、自分がルールを作る側に回れ。いいか、もう一度言う。お前ら、騙されて生きていきたくなければ、勉強しろ！ バカとブスこそ、東大に行け！

#### 例 (14) 【少なめの量的要素】 + 【ネガティブな言語行動】

〈奈央子は友人夫婦のトラブルを解決しようとしている。(ア)〉

[1] 奈央子：沢木さん、あの、これだけは言わせていただきたいんですけども、浮気している女の人と今すぐ別れてください。そうすれば、何もかも解決しますから。そうでしょ、恵理子さん、ね。

例 (13) において、東大進学への勧めは一般的にポジティブな言語行動であるが、勉強嫌いな学生にとっては、ネガティブになる。下線部分は、話の最後にこうしたネガティブな言語行動の反復をわざと明示することで、相手の神経を強く刺激している。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、これから行う言語行動が発話量や回数を惜しまないほど重要であることを強調できる。

例 (14) において、奈央子は友人夫婦のプライバシーに口を挟んでしまい、相手との関係性維持の障害になりかねないネガティブな言語行動を行っている。そこで、下線部分は発話内容の少なさを強調することで重要性を認識させると同時に、最も重要な話のみに留めておくという配慮も示している。こうした文脈におけるメタ言語宣言表現は、量的要素を抑えることで、相対的に言語行動の重要性を高めることができる。

### 4.8 組み合わせた成立要素への言及

上述した成立要素の2つ以上を組み合わせて言及する類型である。「奈央子さんに嘘をつきたくないから、正直に告白します。」(ア)、「だから、俺は俺が最も嫌いな言葉を一度だけお前に言う。」(桜)、「一之瀬さんからの伝言をそのまま伝

えます。」(母)などがその例である。この種類については、これまで分析した各類型のどの文脈なのかを明確にした上で、複合的に分析する必要がある。

#### 例 (15) 〈看護婦の里原は越権行為で看護婦長に注意されている。(医)〉

- [1] 婦長：私は看護婦長として、はっきり言っとかなければいけない。看護士にできる仕事は限定されている。……。今後は何があっても、越権行為はしないと誓いなさい。
- [2] 里原：誓えません。それで患者の命が救えるなら、私はやります。
- [3] 婦長：分かった。今後はそれなりの処分を覚悟しときなさい。
- [4] 里原：はい。
- [5] 婦長：最後に、私個人として言わせてもらう。あなたがそこいらの医者よりよっぽどうまく難しいグラフト採取をやり遂げた時、少しすっとしたわ。

#### 例 (16) 〈監督の三鷹はジムの若いボクサーたちと酒を飲んでいる。(福)〉

- [1] 三鷹：よし、今日はさ、せっかくこうやってみんな集まったから、特別に俺がボクシングをやってる理由を教えてやるよ。
- [2] 上田：おう、早くも酔ってきましたか。
- [3] 三鷹：実は、俺さ、昔いじめられっこだったんだよ。その時、いっつも助けてくれたのが会長でさ。……

例 (15) の [1] は、「私は看護婦長として」で【適格な主体】、「はっきり」で【望ましくない調子】に言及し、警告するという【ネガティブな言語行動】を行っている。[5] は、「私個人として」で【適格な主体】に言及し、理解を示すという【ポジティブな言語行動】を行っている。主体は同じ人であることに変わりないが、[1] において「看護婦長」としての職務上の立場が適格であるのに対して、[5] において「個人」としての立場がふさわしい。このように、立場の変化を明示することで、それによる話や考えの違いを示すことができる。

例 (16) において、「今日はさ」で【適格な物理的場面】、「せっかくこうやってみんな集まったから」で【強めの目的・動機】、「特別に」で【望ましい調子】、「俺がボクシングをやっている理由」で【望ましい素材・話題】に言及し



た上で、自分の過去を知りたがっている相手に教えるという【ポジティブな言語行動】を行っている。下線部分はこうした複数の要素に言及することで、相手の注意を喚起し、十分に興味をそそった上で、ポジティブな言語行動を行っている。

## 5 おわりに

本稿において、メタ言語宣言表現の具体的な用例について、言語行動のどの成立要素に言及しているのかによって分類した上で、種類ごとに「文脈化」の記述を行い、以下の知見が得られた。

まず、メタ言語宣言表現は文脈と切り離されて論じるものではない。一口に「宣言」と言っても、たとえ同じ表現形式であっても、違う文脈においては、「何のために」使われ、何が表現できるのかが異なってくる。次に、言及される言語行動の成立要素による杉戸（1983）の分類は、メタ言語宣言表現を整理する適切な骨組みであるが、学習者の理解を助けようとする「文脈化」を行うためにはまだ不十分である。本稿において、「主体がその要素をどのように捉えているのか」、「言及される言語行動がどのようなものなのか」を加えることで、メタ言語宣言表現が使われる文脈の特定を可能にした。また、言語行動のどの成立要素への言及でも、相手の存在が意識されているのである。メタ言語宣言表現の使用には、言語行動の主体が相手とどのような人間関係を構築したいのか、相手の談話理解をどのようにしたいのか、相手に対してどのような表現効果を実現したいのかが反映される。行おうとする言語行動が相手にとってポジティブなのか、ネガティブなのか、言語行動のこの要素が相手にとって望ましいかどうか、適格であるかどうかなど、常に相手が第一義的に考えられている。

以上のことから、日本語教育の現場で、理解と生成の両面において、「文脈化」の観点を取り入れた表現教育のための指導が必要となってくる。理解面においては、具体的な文脈におけるメタ言語宣言表現を提示し、どのような人間関係と文脈で、「何のために」使われ、何が表現できるのかについて学習者に考えさせることが大切である。生成面においては、学習者自身の言語生活において、何に留意すべきか、どのようなメタ言語宣言表現を必要としているのか

について意識させ、柔軟に使用できるように指導することが大切である。

今後の課題として、まず、メタ言語宣言表現を類型化する際に、杉戸（1983）の12項目のうち、5項目に言及する用例は見つからなかったため、さらに分析資料を増やし、これらの要素に言及する用例を収集していきたい。また、さらに進んでは、本稿で見たメタ言語宣言表現の諸類型が自然談話においてはどの程度に使われているのかを解明した上で、主体の使用意識や相手の受け止め方を究明することも、今後の課題と考えている。

〈早稲田大学大学院生〉

### 注

[注1] …… 言語行動とは「人がことばによって行う思考・表現・伝達の行動、及び、これに対応する理解・受容・反応の行動」である（『言語学大辞典』第六巻述語編p.392）。

[注2] …… デベートにおいては、メタ言語表現総計142例の内、「宣言」の用例は14例（10%）、シンポジウムにおいては、総計95例の内2例（2%）、テレビ討論においては、総計68例の内0例（0%）で、いずれもわずかだった。

### 参考文献

- 川口義一（1996）「日本語指導の文脈化」北海道国際交流センター（編）『日本語教育－異文化間コミュニケーション』pp.69-91. 北海道国際交流センター
- 川口義一（2005）「表現教育への道程－「語る表現」はいかにして生まれたか」『講座日本語教育』41, pp.1-17. 早稲田大学日本語教育研究センター
- 西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 杉戸清樹（1983）「待遇表現としての言語行動－注釈という視点」『日本語学』2(7), pp.32-42. 明治書院
- 杉戸清樹（1989）「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8(2), pp.4-14. 明治書院
- 杉戸清樹（2005）「日本人の言語行動－気配りの構造」『表現と文体』pp.362-371. 明治書院
- 古別府ひづる（1993）「専門的内容における口頭発表のメタ言語表現」『表現研究』59, pp.12-22. 表現学会

